匠に技あり

宮師

上山　翔さん　(宮匠永田神器)

見えない部分も精緻に細工

小型の神殿・神具を製作

神社の末社や企業神社の社として造営される比較的小型の神殿や神具を調製する職人を「宮師」と呼ぶ。宮師が手掛ける神殿の完成品は高さにして約1～3㍍と車で運べるほどの大きさだが、神社建築の伝統の技が凝縮されている。

大阪市福島区にある神殿・神具の製作会社・宮匠永田神器で宮師として順調に実績を重ねている上山翔さん(38)。

9年前に入社し先輩宮師の下で修業を積み、今は一通りの仕事を任されている。若手の筆頭格として、宮師である永田克之会長や吉田丈彦社長からの期待を背負う。

神殿造営の現場で設計図として用いられるのは「尺杖(しゃくづえ)」と呼ばれる1本の杖。尺杖には神殿前方に延びる屋根・向拝の柱の寸法が記され、この柱の寸法が決まれば他の部材の寸法が決まっていく。神殿の様式や大きさごとに尺杖があり、注文に応じて使い分けている。

向拝には形状に合わせた型板が存在し、型板を基に切り出された部材を組み合わせることで神社建築に特徴的な優美で美しい曲線が生み出される。

向拝を扱えるようになれば「一人前」とされ、この域に達するまで10年はかかるという。

工房には相当数の尺杖と型板が整頓してつるされている。全国で4千近くの神殿を製作してきた同社の「財産」だ。

上山さんは設計図代わりの尺杖や型板を使って部材を切り出し、くぎを使わず部材を接合するための「ほぞ」や、屋根の軒下に見られるマス組など必要な細工を手作業で精緻に施す。

「隠れて見えない部分であってもしっかりと細工しています。用材に最高級の木曽ヒノキを使っていますので木地の美しさを損なわないよう、傷つけたり汚れたりしないよう、細心の注意を払っています」と話す。

見えないところでは、工房の整理整頓・掃除が徹底されている。おがくずを吸い上げる集塵装置を設置するほどの力の入れようだ。

真摯(しんし)に神殿造営に取り組む上山さんは「業界全体で高齢化が進んでいると感じる。若い担い手が必要なので頑張りたい」と宮師としての抱負を語った。

(髙橋知行)

神殿の部材に細工する上山さん。右にある神殿を見ると、木地や向拝の曲線の美しい仕上がりが分かる